

資料

事物選択経験がラベルの解釈に及ぼす効果

—— 幼児期における解釈方略の発達的变化との関連で ——

針 生 悦 子*

DOES CHILDREN'S EXPERIENCE OF SELECTING A FAMILIAR OBJECT FOR
A NOVEL LABEL AFFECT THE FOLLOWING INTERPRETATION OF THE LABEL?

Etsuko HARYU

In a previous study (Haryu, 1991) children were asked to choose one out of two objects, familiar and unfamiliar, as the referent of a novel label under conditions where it was clear that the novel label would refer to the familiar object, so that a familiar object would be chosen. Then the children were asked whether the label was referring to the familiar object. Three-year-olds were found to reject a novel label for a familiar object presumably because they were inclined to find that category terms were mutually exclusive. But five-year-olds accepted the novel label for a familiar object. The present study aimed at testing the following two hypotheses. (1) Repeated questioning misleads three-year-olds in rejecting a novel label for a familiar object; (2) Five-year-olds tend to interpret the label as being consistent with their choice in a prior task. The result showed that the experience of choosing a familiar object in a prior task did not affect interpretation of the label.

Key words : prior experience of choosing an object, label interpretation, mutual exclusivity, repeated questioning.

問 題

子どもが語彙を獲得していくときのスピードは相当なものであって、就学前児は1日に10~20もの語を学習しているとの指摘もある(Nelson, 1988)。しかも、その多くは、事物を前にして語が与えられるという指示定義を通じてであるという(Carey, 1982)。

もっとも、このような定義の仕方は実に曖昧なものであって、語の意味(語意)を一意に定めるものとはならない。例えば、りんごを前にして何か語が発せられたとする。語は、“りんご”といった事物のカテゴリ名かもしれないし、“丸い”、“赤い”といった属性を指

すものかもしれない。“おいしそう”のように、その事物によって喚起された話者の内的状態に関するものだというとも考えられる。すなわち、このような場面で語意について考えることのできる仮説の数は、無限なのである。その中から正しい仮説を選び出すためには、こうして考えられた仮説を1つ1つ検証していく必要がある。

しかし、子どもが語彙を獲得していくときのスピードを見ていると、その過程でいちいち、考える仮説を片っ端から検証していくといった複雑な処理を行っているとは考えにくい。子どもがどのような語意仮説を立てるかということに対しては何か制約が働いているはずである(Carey, 1982)。そのような制約は、これまでもいくつか指摘されてきているが、本研究はその1つである相互排他性原理(mutual exclusivity principle

* 東京大学教育学研究科 (Department of Educational Psychology, Faculty of Education, University of Tokyo)

; Markman, 1987) について取り上げる。これは、“一事物一名称 (1 つの事物はただ 1 つの名前を持つ)” の仮定である。

Markman と Wachtel (1988) は、そのような原理の存在を確かめるため、幼児を対象に、既に名前がわかっている事物 (既知物) と名前のわからない事物 (未知物) のうちから一方を選ばせるという課題を実施した。すると子どもたちは、新奇なラベル X を用いて「X をとって」と言われると、「1 つとって」とだけ言われたときより、未知物を多く選択するようになったのである。“X” に対して既知物を選べば、既に名前のわかっている事物にもう 1 つラベルを認めることになり、相互排他性原理に反する。したがって、この結果は、3 歳児が相互排他性原理に従ってラベルの解釈を行っていることを裏づけるものと見なされた。

しかし、このような原理はそもそも、学習場面に存するノイズを排して効率よく語意に達せしめるような制約として提出されてきたものである。これに対して Markman ら (1988) は、新奇なラベル以外にはどちらの事物を選択すべきかを定める手掛かりがないようなとき、相互排他性がヒューリスティックとして用いられることを示したにすぎない。また Markman ら (1988) は、このような原理が言語という領域に固有なものだとしながら、実験では事物選択しか取り上げておらず、ラベルの解釈内容は問題にしていなかった。

そこで針生 (1991) は、これら 2 つの問題点を克服するために、新奇なラベルを (それが既知物の名前であることを示唆するような) 文脈の中で提示する条件を設定した。そして、事物選択だけではなくラベルの解釈についても取り上げ、それが年少 (3 歳) から年長 (5 歳) へとなるにつれてどのように変化していくのかを問題にした。すなわち、例えばりんご (= 既知物) とリップミラー (= 未知物) のなかから一方を選んで人形に渡してもらうという課題で、「メリーちゃん (= 人形の名) はお腹がすいています。ヘク (= 新奇なラベル) を渡してあげて」と教示する条件を設定し、それに対して子どもはどちらの事物を選択するか、その際ラベルはどう解釈しているかを調べたのである。その結果、第 1 に、年少児は、事物選択課題で適切な文脈が与えられれば既知物をより多く選択するようになったが、ラベルの解釈では文脈の有無にかかわらず“ラベルは未知物を指す”とする反応が多かった。第 2 に、事物選択で相互排他性や文脈を利用する仕方に年齢差は見られなかった。しかし、ラベルの解釈では、年少児が文脈の有無によらず“ラベルは未知物の名前である”との解釈に固執したの

に対し、年長児は適切な文脈があれば積極的に“ラベルは既知物のもう 1 つの名前である”との解釈を行っていた。

ここではまず、同じ被験者が事物選択をしてからラベルの解釈を行っていることの影響を考慮しないでおく。するとまず、上で見いだされた第 1 の点は、少なくとも年少児にとって相互排他性が、ラベルを解釈するときに (そしてそのときに限って) は必ず用いなければならないような原理、すなわち、言語という領域に固有の制約になっていることを示すものと言えよう。また第 2 の点は、次のようなことを示唆していると考えられる。年少 (3 歳) から年長 (5 歳) へとなるにつれ、子どもは文脈次第では既知物に複数のラベルを受け入れることもできるようになっていく。しかし、事物選択に際して相互排他性や文脈を利用する仕方に年齢による違いは見られなかった。だから、ラベルの解釈方略がそのように変化していくのは、(文脈をうまく利用できるようになるというように) 新しい能力が獲得されたり、(相互排他的な方略が使われなくなるというように) 古い方略が捨て去られたりして、子どもの使用することのできる方略のレパートリーに変化が生じるためではなかろう。むしろ、年少児と年長児では、そのような方略のレパートリーの中から、ラベルを解釈するにあたってはどの方略を選んで用いていくのかというところが違うのである。したがって、このような変化は、ラベルの解釈という行為を支配している子どもなりの言語観といったものの変化、すなわち、言語に対する子どものメタ的な考え方の変化を反映しているのではないか。このように考えられるのである。

しかし針生 (1991) においては、事物選択課題の終了後、再びそれぞれの事物セットを示し、先刻の事物選択課題ではどちらを選んだのか記憶を確認し、その上で被験児の選んだ事物と選ばなかった事物の両方についてラベルの受け入れを問うという方法がとられている。このように被験児がラベルの解釈に先立って事物選択を行っていたことの影響を考えに入れて上の結果を見直すなら、この結果は、年少児では事物選択とラベルの解釈とが食い違っているが、年長児ではこれらの反応が一貫していることを示すものだということがわかるだろう。もちろんデータをこのように捉え直すことは、上でなされたような考察をただちに却下するものではない。が、上のような結論を下す前に、以下のような説明の可能性についても吟味すべきであることに気づかせてくれる。

まず年少児については、事物選択とラベルの解釈内

容が食い違うという不安定な反応は別の要因によってもたらされたものであり、結果として、ラベルの解釈における子どもの本当のパフォーマンスが覆い隠されてしまっているということが考えられる。すなわち、年少児も実は、文脈の中で新奇なラベルが提示されたときには、そのラベルが既知物のもう1つの名前だと考えたのかもしれない。しかし、まず事物選択を求められ、次にその記憶を確認され、その上でラベルの受け入れが問われるといった手続は、かなり冗長なもので、「必要なだけ話せ」という会話の水準 (Grice, 1975) にも反している。課題の中で子どもは、自分が既に答えたはずのことについて繰り返し問われているように感じたかもしれず**、そのような質問の繰り返しは、年少児には答えの変更を求めるもののように受け取られたのではないかと*** (仮説1)。

一方、年長児については次のようなことが考えられる。彼らは、実験場面において一時的に、自分の事物選択行動と矛盾しないようなラベルの解釈を行っただけなのであり、そのようにできるという点で年少児より優れていたにすぎないのではないか(仮説2)。もしそうだとすれば、子どもが発達するにつれ文脈を重視してラベルの解釈をするようになっていくことを示した実験結果は、日常場面でも彼らが、ラベルと事物の対応関係(=相互排他性)より、ラベルが使われた文脈を重視して、ラベルの解釈をするようになっていることを反映したものとは言い難い。

本研究は、以上のような説明の可能性について検討することが目的である。そこで実験では、年少(3歳)、年中(4歳)、年長(5歳)の各年齢において、事物選択のあとでラベルを解釈させる条件と(事物選択はさせずに)ラベルの解釈だけをさせる条件で、新奇なラベルの解釈の仕方を比較する。

このとき仮説 1 は年少児に関して、ラベルの解釈だ

• もちろん、事物選択を先に行ってからラベルの解釈を問われる条件の子どもが、既に答えたはずのことを繰り返し尋ねられているように感じるとすれば、それは、子どもの中で、事物選択とラベルの解釈とが（一方は行動の上で課題にどのように対処するかということであり、他方は言語の問題であるということに）別個の領域に属するものとは捉えられていないということであろう。したがって、ラベルの解釈だけを問うという手続にすることで、新奇なラベルを既知物のもう1つの名前とする反応が増えるなら、このことはまさに、言語という領域に固有な制約として相互排他性原理が存在するということを否定するものだと言える。

*** 実際、Seigal ら(1988)は、このような質問の繰り返しによる圧力を取り除くなら子どもの遂行成績が上がるということを保存課題において示している。

ける条件では、事物選択をしてからラベルの解釈をする条件よりも、ラベルを既知物の名前だとする反応が多くなるであろうと予想する。

また、仮説2から導かれる予想は、次のようなものである。年長児においては、先行する事物選択課題で既知物を選んでしまったということが、それと矛盾しないラベルの解釈をさせる圧力になっている。したがって、そのような圧力のない、ラベルの解釈のみの条件では、ラベルを既知物の名前とするような反応は減るであろう****。

仮説3は、針生(1991)において考察されたように、ラベルの解釈は言語という領域に固有の原理に支配されているとするものである。年少児が文脈の有無によらず新奇なラベルは既知物の名前ではないとするのも、年長児が適切な文脈の中でならラベルは既知物の名前であることを認めるのも、質問の繰り返しが年少児への圧力になったとか、年長児では事物選択行動とラベルの解釈を一致させようとする態度が年少児より強まっているというように、言語外の要因によるものではない。新奇なラベルの解釈をめぐる見られたそのような違いは、年齢が進むにつれて実際にラベルの解釈方略が変化していていることを捉えたものなのだとする立場である。したがってこの仮説3は、どの年齢においても、事物選択のあとでラベルの解釈をする条件と、事物選択はせずにラベルの解釈だけをする条件で、その解釈の仕方に大きな違いはみられないであろうと予想する。

本研究は、以上3つの仮説について検討するものである。

方 法

被験児 保育園の年少、年中、年長児各32名を16名ずつ、事物選択先行 (S[+]) 群と事物選択なし (S[-]) 群にわりあてた。各群とも男女比は1対1で、年少児は S[+] 群が平均3:11 (レンジ3:4~4:3), S[-] 群が平均3:10 (レンジ3:5~4:3), 年中児は S[+] 群が平均4:10 (レンジ4:6~5:4), S[-] 群が平均4:11 (レンジ4:6~5:4), 年長児は S[+] 群が平均5:10 (レンジ5:6~6:4), S[-] 群が平均5:11 (レンジ5:6~6:4) である。

**** また、もしこのような仮説が支持されるなら、それは、子どもが年長になるにつれ、1つの事物に複数の名前を受け入れることができるようになっていくそのきっかけについても、重要な示唆を与えてくれるものになるだろう。というのも、そのような結果は、行動の上で場面にどのように対処するかということと、言語領域の問題としてラベルをどう解釈するかということとを統合しようとする中に、そのきっかけはひそんでいるのかもしれないということを示すものだからである。

ジ5:6~6:4), S[−] 群が平均5:9 (レンジ5:6~6:2) であった。なお, S[+] 群の被験児は各年齢とも, 針生 (1991) に参加した子どもたちである。

材 料 実験で用いた既知物と未知物のセット, 文脈, ラベルは, TABLE 1 に示した。事物は, 上の被験児とは別の年少児12名 (平均3:9, レンジ3:7~3:11) にその名称・用途・使用場面を尋ね, 全員が既知物には命名でき, 未知物に関しては名称・用途・使用場面を知らないことが確かめられている。また, 新奇なラベルとして用いた無意味音節は, 梅本・森川・伊吹 (1955) の無連想価が50以上のものの中から選択されたものである。以上は針生 (1991) に準じた。

TABLE 1 Stimulus Materials, Contexts and Novel Labels for Experiment.

	Familiar	Unfamiliar	Context	Label
①	りんご	リップミラー	おなかですいている	ヘク
②	石けん	カンバスクリップ	泥んこになってしまった	ミュ
③	クレヨン	バッグハンガー	お絵書きをする	ソイ
④	ハブラシ	パイ車	歯磨きをする	ルチ
⑤	靴	ところてん押し出し器	お外に行く	オヌ

手 続 1対1の面接形式で, 被験児にはまずメリーちゃんという名前の人形が紹介される。ここまではS[+]群, S[−]群とも同じである。このあとS[+]群には2つの事物 (TABLE 1 に示されたような未知物と既知物のセット) のうちから1つを選ぶという事物選択課題が実施された。具体的には, 例えば「メリーちゃんはお腹がすいています (=文脈)。ヘク (=新奇なラベル) を渡してあげて」との教示のあと, 人形の前にりんご (=既知物) とリップミラー (=未知物) を並べ, その中からどちらか一方を選択するよう求めた。このような事物選択がすべての事物セットで終了したあと, 再びそれぞれの事物セットを示し, 先刻の事物選択課題ではどちらの事物を選んだかを確認した。その上で, 被験児が選んだ事物・選ばなかった事物の両方について順に「これはヘクだと思った?」と尋ね, ラベルの受け入れをチェックした。このとき, 1回の質問で反応が得られなければ, また同じ質問を繰り返し, それでも無反応な場合には, その被験児はその事物に対するラベルの受け入れを拒否したものと見なした。

一方, S[−] 群の被験児には, まず「メリーちゃんはお腹がすいています。だからヘクを渡してあげたいの」と告げておいてから, 人形の前にりんごとリップ

ミラーを並べ, 「ヘクはこの中にあるのだけれど, どっちな?」と尋ねた。ここで (ヘクだと思う方の事物を) 指さすなどの反応があれば, それをラベルの解釈と見なした。反応がないときには, さらに「ヘクはどっちだと思う?」と促し, それでも反応を得ることができなければ, 初めに既知物, 次に未知物という順序で, それがヘクであるかどうかを尋ねた。このラベルの受け入れをチェックする手続は, 上のS[+] 群と同じであった。

どちらの群についても, 各セットで, 一方の事物にのみラベルを認めた場合に, ラベルはその事物を指すと解釈されたものとした。両方の事物に対してラベルを認める, あるいは, どちらの事物に対してもラベルを認めないといった反応が見られたセットについては, ラベルの解釈が行われなかった (無反応) のものと見なした。

実験計画 年齢(3)×ラベルの解釈に先立つ事物選択の有無(2)

結 果

各事物セットで“ラベルは既知物を指す”と解釈された場合に1点として被験児ごとに5セットの合計を求め, これを既知物へのラベル受容得点 (label acceptance score for familiar objects; LF 得点) とした。各群でその平均 (SD) を求めると, 年少児・S[+] 群が0.8 (1.2), 年少児・S[−] 群が1.1 (1.6), 年中児・S[+] 群が2.3 (1.5), 年中児・S[−] 群が2.5 (1.6), 年長児・S[+] 群が4.5 (0.9), 年長児・S[−] 群が4.1 (1.3) であった (FIG. 1)。年齢×条件 (事物選択の有無) の分散分析の結果, 年齢の主効果のみが有意で ($F(2,90) = 47.28, p < .001$), 条件の主効果 ($F(1,90) = 0.02$) と交互作用 ($F(2,90) = 0.56$) は有意にならなかった。そこで年齢の主効果に関して対間比較 (Scheffé 法) を行ったところ, [年少児] < [年中児] < [年長児] であることが見いだされた。すなわち, “ラベルは既知物を指す”との解釈は年齢が進むにともない増加すること, しかも, そのような解釈のされやすさは, どの年齢でも, ラベルの解釈に先立つて事物選択を行ったかどうかで変わらないことが示された。

念のため, “ラベルは未知物を指す”と解釈された場合とラベルの解釈が行われなかった (無反応) の場合についても, 上と同様の方法で得点化し, それぞれを, 未知物へのラベル受容得点 (label acceptance score for unfamiliar objects; LU 得点), 無反応得点 (no-response score; NR 得点) として分析した。まず LU 得点は群ご

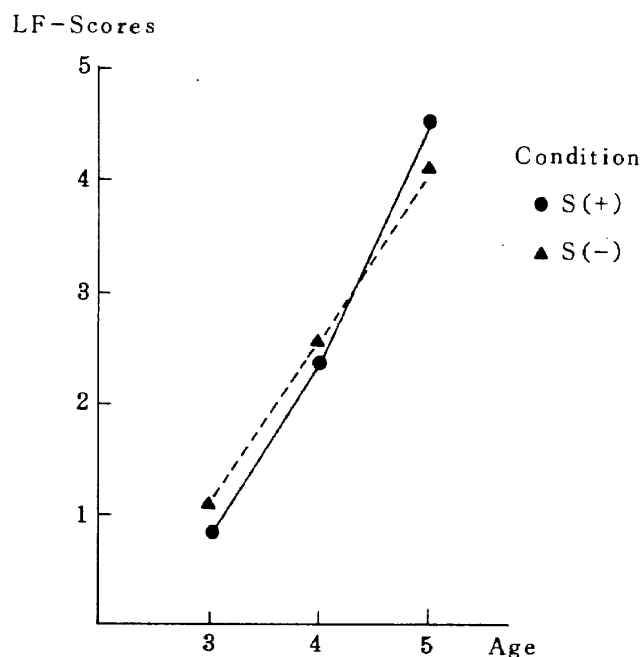


FIG. 1 LF scores (Label acceptance scores for familiar objects)

との平均 (SD) が, 年少児・S[+] 群で2.3 (1.8), 年少児・S[-] 群で3.1 (1.7), 年中児・S[+] 群で1.8 (1.3), 年中児・S[-] 群で2.4 (1.7), 年長児・S[+] 群で0.1 (0.3), 年長児・S[-] 群で0.8 (1.3) であった。分散分析では, 年齢の主効果 ($F(2,90)=20.23, p<.001$) と条件の主効果 ($F(1,90)=6.37, p<.05$) が有意で, 交互作用 ($F(2,90)=0.04$) は有意にならなかった。対間比較より, LU 得点は [年少児, 年中児] > [年長児], [事物選択先行 (S[+]) 群] < [事物選択なし (S[-]) 群] であることが見いだされた。この結果は, 以下のようなことを示している。まず, “ラベルは未知物を指す” との解釈は, 年少児や年中児において年長児より多く, “ラベルは既知物を指す” との解釈とほぼ相補的な関係をなしていた。また, 事物選択はせずにラベルの解釈だけをする群の方が, 先に事物選択を行ってからラベルの解釈をする群よりこのような (“ラベルは未知物を指す” という) 解釈を多く行っており, この点はどの年齢においても同じであった。

一方, NR 得点の各群平均 (SD) は, 年少児・S[+] 群1.9 (1.9), 年少児・S[-] 群0.8 (1.1), 年中児・S[+] 群0.9 (1.3), 年中児・S[-] 群0.1 (0.3), 年長児・S[+] 群0.4 (0.9), 年長児・S[-] 群0.0 (0.0) で, 分散分析において, 年齢の主効果 ($F(2,90)=8.36, p<.001$) と条件の主効果 ($F(1,90)=12.38, p<.001$) は有意だったが, 交互作

用 ($F(2,90)=0.78$) は有意にならなかった。年齢の主効果は [年少児] > [年中児, 年長児] であること, 条件の主効果は [事物選択先行 (S[+]) 群] > [事物選択なし (S[-]) 群] であることを示すものであった。すなわち, ラベルの指すものが既知物と未知物のうちどちらであるかを決めかねるような反応は, 年少児の方が年中児や年長児より多く, 条件では, 事物選択を先に行った群の方が, ラベルの解釈だけを求められた群よりも多かった。

また各群において, “ラベルは既知物を指す” と解されていたのか, “未知物を指す” と解されていたのか, そのおおまかな傾向を見るため, 5セット中で “ラベルは既知物を指す” という解釈 (F) と “ラベルは未知物を指す” という解釈 (U) のうち, 前者の解釈をより多く行っていた者 ($F>U$), 後者の解釈をより多く行っていた者 ($F<U$), (無反応の事物セットを除く) 両方の解釈を均等に行っていた者 ($F=U$) の数をかぞえた。それについて符号検定を行った結果を TABLE 2 に示す。年少児は, “ラベルが既知物を指す” というより “未知物を指す” としがちであるが, 年中児では, ラベルを既知物の名前とするか未知物の名前とするかが五分五分になっており, 年長児は圧倒的に “ラベルは既知物を指す” と解釈していることがわかる。また, このような年齢にともなう変化は, ラベルの解釈に先立って事物選択を行ったかどうかによらず見られた。

以上の結果をまとめると次のようになるだろう。新奇なラベルが (それが既知物の名前であることを示唆するような) 文脈中で提示されたとしても, 年少児はあくまで,

TABLE 2 The Number of Children who interpreted novel labels in the following way. (F=interpretation that the novel labels given in the context refer to Familiar Objects.; U=interpretation that the labels refer to Unfamiliar Objects.)

condition	age	F>U	F<U	F=U
S[+]	年少児(3)	2	14*	0
	年中児(4)	8	7	1
	年長児(5)	16*	0	0
S[-]	年少児(3)	4	12*	0
	年中児(4)	9	7	0
	年長児(5)	15*	1	0

(*..... $p<0.05$)

そのラベルが未知物を指すと考える。が、年長児になると、“ラベルは既知物を指す”という(文脈にそった)解釈が圧倒的になる。また、ラベルの解釈に先立って事物選択を行ったかどうかということは、“ラベルは既知物を指す”と解釈することに対して、全く影響を与えていなかった。が、“ラベルは未知物を指す”との解釈は、先に事物選択を行った群の方が少なくなっており、無反応はその逆であった。そして、事物選択の有無がラベルの解釈に与えるこのような影響は、どの年齢においても等しく見られた。

考 察

以下では、上で見いだされた結果にもとづき、問題のところで述べた3つの仮説について順に考察を加えていく。

(1) 仮説1： 針生(1991)において年少児は、新奇なラベルが(それが既知物の名前であることを示唆するような)文脈中で提示され、「メリーちゃんはお腹がすいています。ヘクを渡してあげて」という教示が与えられれば、人形に既知物を渡してやることができた。にもかかわらず、それがラベルの指示対象だということは、認めようとしなかった。これを、事物選択後にラベルの解釈を求めるという手続が年少児には答えを変えさせるような圧力になったためだとするのが、仮説1の立場であった。すなわち、そのような(冗長で会話の公準にも反するような)手続が、年少児には、既に答えたはずのことについて繰り返し尋ね、答えの変更を迫るもののように受け取られた。結果として、年少児は“ラベルは既知物を指す”とする最初の解釈を翻すことになったのではないかと。したがって、手続の冗長性をなくし、ラベルの解釈だけを求めるようにすれば、年少児も文脈の中でラベルが提示されたときには“ラベルは既知物を指す”と解釈していたことが捉えられるのではないかと。これが、そこから導かれた予想であった。

このような予想に対して結果は、どの年齢においても、ラベルの解釈に先立ち事物選択をさせたからといって、“ラベルは既知物を指す”という解釈がされにくくなるというようなことはなく、年少児はラベルの解釈だけ尋ねられた場合にも、“ラベルは既知物を指す”とすることに強い抵抗を示すというものであった。

したがって、針生(1991)の(本研究ではS[+]群にあたる)年少児が、事物選択課題では既知物を選んでおきながら、ラベルの解釈課題ではそれが既知物を指していることを認めようとしなかったのは、事物選択のあとにラベルの解釈を問うという冗長な手続が、反応を変

更させるような圧力になったためだとは言えない。

では、この結果は、質問の繰り返しが子どもの反応を変更させるような効果を持つことを示した先行研究(Siegal et al., 1988)に対して、どのようなことを含意するのか。それは直ちに、同じ質問の繰り返しがそのような効果を持つということまで否定するものなのだろうか。結論を先に言えば、否である。この結果は必ずしもSiegalら(1988)の知見を否定するものではない。なぜなら、Siegalら(1988)が示したのは、保存課題において全く同じ質問(=「どちらの列のボタンの数がより多い?」)を2回繰り返しした場合(2質問条件)と1回しか尋ねなかった場合(1質問条件)で比較すると、1質問条件の方が子どもの遂行成績はよかったということだからである。これに対して、本研究のS[+]群の子どもが問われていたことは、初めが、どちらの事物を選ぶかということであり、次が、ラベルはどちらの事物を指しているのかということであった。すなわち、これら2つの質問では(前者は行動の領域において課題にどのような対処するかということであり、後者は言語の問題であるということ)対象としている領域が異なっていたのである。したがって、そもそも子どもは、これら2つの質問を同じことの繰り返しとは受け取っていないからではないか。とすれば、事物選択課題のあとでラベルの解釈をする条件と(事物選択はせずに)ラベルの解釈だけをする条件で“ラベルは既知物を指す”という解釈のされやすさに違いはない、少なくとも先行する事物選択課題で既知物を選んだことがその後の解釈課題で“ラベルは既知物を指す”と判断することの妨げにはなっていないことを示した、この結果は、子どもにとって事物選択とラベルの解釈とが別の領域をなしており、年少児がラベルの解釈を行う際に従っている相互排他性という原理は言語に固有のものであるということにより強い支持を与えるものだと言えよう。

(2) 仮説2： 針生(1991)において、適切な文脈があれば年長児は積極的に“ラベルは既知物を指す”と解釈していくことが示された。このことについて、年長児は年少児に比べ、事物選択行動とラベル解釈との一貫性を保とうとする態度が強くなっているにすぎないとするのが、仮説2の立場である。すなわち年長児は、事物選択課題で既知物を選んでしまったという事実をいわば取り繕うために、その場で一時的に“ラベルは既知物を指す”とただけなのであり、針生(1991)で示されたような彼らのパフォーマンスは、事物選択のあとでラベルの解釈が問われるという実験手続の産物なのではないか。したがって、(事物選択はさせずに)初

めからラベルの解釈をさせるようにすれば、既知物へのラベル受け入れは減るのではないか、ということが予想された。

しかし結果は、事物選択の有無にかかわらず年長児は“ラベルは既知物を指す”と解釈しているというものであった。すなわち、S[+]群の年長児も、ラベルの解釈に先立つ事物選択課題で既知物を選んでしまったことをいわば取り繕うため、実験場面で一時的に“ラベルは既知物を指す”としたわけではないのである。したがって、文脈の中でラベルが提示される条件において、“ラベルは既知物を指す”との解釈が年齢とともに増えるのは、(ひとつながりの場面の中で)事物選択行動とラベルの解釈を一致させようとする態度が発達にとともに強まるためとは言えない。

一方、“ラベルは未知物を指す”と解釈する場合やラベルの解釈は行わない(無反応の)場合についての分析からは、ラベルの解釈に先立って事物選択を行うことの効果が見いだされた。それは、先の事物選択課題で既知物を選んだという経験は、“ラベルは未知物を指す”と積極的に解釈することを抑え、ラベルがどちらの事物を指すかについてははっきりした判断を下さないようにさせる、すなわち、無反応を増加させるというものであった。また、そのような効果は、どの年齢においても等しく見られた。すなわち、文脈へのあてはまりを考えるとラベルの指示対象は既知物であるような気もするのだが、相互排他性へのこだわりがあつてどうもそのような解釈は受け入れたくないという場合、S[-]群、すなわち、ラベルの解釈だけを求められる条件の子どもは、比較のためらわずに“ラベルは未知物を指す”とする。しかし、S[+]群の子どもの場合、先に事物選択課題で既知物を選んでしまったという経験が、それに反するようなラベルの解釈を積極的に行うことを控えさせるらしいのである。

以上から言えるのは、ラベルの解釈に先立つ事物選択課題で既知物を選んだという(実験場面における一時的な)経験だけでは、それ以前には相互排他性を重視してラベルの解釈を行ってきた者に180度の方針変更を迫り、相互排他性より文脈を重視したラベルの解釈を行っていくようにさせるには不十分だということである。事物選択の経験は、実験場面におけるラベルの解釈に、そのような直接的な影響を及ぼしていたわけではない。しかしその一方で、相互排他性だけにこだわってラベルの解釈をすることに対してはブレーキをかける効果があるらしいことも示された****。このように日常生活の中で自分が既に持っている(“一事物一名称”

との)言語観と葛藤を起こすような場面に何度も出会うことが、長い目で見れば、言語観の変化をもたらし、最終的にはラベルの解釈方略の変化へとつながっていくのかもしれない。

(3) 仮説3: これは、針生(1991)で“ラベルは既知物を指す”とする反応が年齢が上がるにつれて増えているのは、ラベルの解釈に先立って事物選択をさせるといった手続が、異なる年齢には異なる効果を及ぼしたためなのではなく、実際にラベルの解釈方略が年齢とともに変わっていくことを捉えたものなのだとする立場である。したがってここからは、ラベルの解釈に先立ち事物選択をしたかどうかということで、ラベルは既知物のもう1つの名前であるとする解釈が増えたり減ったりするようなことはないと言われた。

結果は、そのような予想にならなかったものであった。このように本研究においては、文脈中でラベルが提示されたとき“ラベルは既知物を指す”とする反応が年齢とともに増えるのは、事物選択のあとでラベルの解釈を問うといった手続が年齢によって違う効果を産みだしたためなのではなく、ラベルを解釈する際にはどのような情報を重視するかという方略の変化を反映したものであるということが示唆された。

このように年齢にともなう変化がラベルを解釈する際にどのような方略をとるかの変化だということは、その基底に、ラベルの解釈という行為を支配している言語観の変化があることを示唆するものであろう。ラベルを解釈する具体的な方略が変化することと、言語観が変わることとの因果関係について、現段階ではまだ何とも言えない。それでも、そもそもそのような変化が何によってもたらされるのかということについては、少なくとも2つの可能性を指摘することができるように思われる。

その1つは、(2)でも考察されたように、日常生活の

***** もちろん、このような事物選択行動の効果が見られたことの原因として、S[+]群とS[-]群でラベルの解釈を求める際の手続が異なっていたということも考えられないわけではない。S[+]群では、被験児の選んだ事物と選ばなかった事物の両方について、ラベルの受け入れを問うた。それに対してS[-]群では、2つの事物のうちから、被験児がラベルの指示対象だと考える方を指摘させるという方法をとった。そのため、S[-]群はより強制選択に近い事態になり、無反応が少なくなったということも確かにあるだろう。しかし、“ラベルは既知物を指す”と判断することに対しては事物選択行動の効果が見られなかったことを考えると、このような無反応の増減は、“ラベルは未知物を指す”と解釈することの増減にのみ由来するものである。少なくともこの点は、注目に値するものと思われる。

中で、自分が既に名前を知っている事物が新しいラベルで呼ばれるのを耳にし、その場面で適応的に振舞うことと、“一事物一名称”といった言語観とのあいだの葛藤を経験することである。もう1つは、自分がふだん話しているのとは別の言語体系、すなわち外国語の存在に気づくということである。特にこの2番目の点に関して、実際に年長児の中には、ラベルは既知物の名前だと認めたあと、「だって僕、知ってるよ。りんごのこと、英語でヘクっていうんだよ」と自発的にその理由を述べる者もいた。針生(1991)も、事物名解釈方略の変化を支えている言語観の変化として、ことばの恣意性の理解ということを挙げている。確かに、日本語では“犬”であるものが、英語では“dog”と呼ばれることを知れば、それが、(同じ1つの事物がいつも同じラベルで呼ばれるわけではなく、その意味で)ことばは恣意的なものなのだというに気づく1つのきっかけになることは十分に考えられる。そして、そのことがさらには、ラベルの解釈方略にも影響を与え、子どもを、既に名前のわかっている事物の2番目、3番目のラベルの探索へと向かわせるのかもしれない。

語意を明らかにしようとする際に、子どもは相互排他性の原理に縛られているということで、彼らには、犬は“犬”であると同時に“動物”でもあるといった類包摂関係の理解が困難なことも説明される(Markman, 1987)。したがって、子どもが犬は“犬”であると同時に“動物”でもあることを受け入れられるようになっていくためには、どのようなときにも相互排他性に従うというのではなく、適切な文脈*****があるときには、相互排他性よりその文脈を重視してラベルの解釈を行うというように、ラベルの解釈方略を変化させていくことが重要であろう。そのような解釈方略の変化が何によってもたらされるのかについて(ここでは2つの可能性を指摘しておいたが)検討していくことは、今後に残された課題と言えよう。

***** それは状況文脈であるかもしれないし、「これは○○語である」というような、そのラベルが属する言語体系に関する情報であるかもしれない。

引用文献

- Carey, S. 1982 Semantic development : The state of the art. In E. Wanner & L.R. Gleitman (Eds.), *Language acquisition : The state of the art*. Wiley.
- Grice, H.P. 1975 Logic and conversation. In P. Cole & J. Morgan (Eds.), *Syntax and semantics vol. 3 : Speech acts*. Academic Press.
- 針生悦子 1991 幼児における事物名解釈方略の発達の検討—相互排他性と文脈の利用をめぐって—*教育心理学研究*, 39, 11—20.
- Markman, E.M. 1987 How children constrain the possible meanings of words. In U. Neisser (Ed.), *Concepts and cognitive development*. Cambridge University Press.
- Markman, E.M. & Wachtel, G.F. 1988 Children's use of mutual exclusivity to constrain the meanings of words. *Cognitive Psychology*, 20, 121—157.
- Nelson, K. 1988 Constraints on word meaning ? *Cognitive Development*, 3, 221—246.
- Siegal, M., Waters, L.J. & Dinwiddy, L.S. 1988 Misleading children : Causal attributions for inconsistency under repeated questioning. *Journal of Experimental Child Psychology*, 45, 438—456.
- 梅本堯夫・森川弥寿雄・伊吹昌夫 1955 清音2字音節の無連想価及び有意味度 *心理学研究*, 26, 148—155.

付 記

実験を実施するにあたりご協力いただいた、日野市役所児童課の土方課長、市内保育園の先生方、園児の皆さん、論文の作成過程でご指導いただいた東京大学の大村彰道先生に、深く感謝いたします。

(1991年10月11日受稿)